三月長崎製鉄所竣工

蒸気船伝習の起るや監督永井玄蕃思へらく造船の製鉄の作業なくむ破損修理を如何せんと乃ち上請して器械を和蘭に求め工場を長崎に興す五年告成る[illegible]
安政乙卯阿蘭救火船図置製鉄場令阿蘭貢其機器[illegible]人丁巳成至乃相地于飽浦経始費作飽浦鉄冶陽江里許遮運之便[illegible]越五年鎔炉製鑵諸場結構成依泰西模様為日一千三百餘日費用五万八千餘金既成可謂国朝創開

四月長州侯毛利慶親萩城に於て蒸気車運転を試行せしむ

藩士中島治平安政中長崎に出で蘭語英語を学び理化学冶金術等を修む去年侯命を以て鹿児島に赴き反射炉及硝子硝石製造を実視し又長崎に至り模型蒸気機械等を購入し携帰て其走馳の状態を侯覧に供したり

七月英国人の強請を以て東海沿岸測量を許す船長某伊能勘解由所製実測図を視て其正確に服し為に測量を止む

先是英人屢言に海岸測量せざれば航行に害ありと当時幕府論者往々慕行あれども幕府其事変を生せんことを恐れ容易に許諾せず英人強請不止竟に其請を納る英船先ず安房相模より伊豆の沿岸に及ぶ船中に組みたる幕吏[illegible]三郎其所携伊能実測図を示す船長一覧初めは軽侮の色なりしが其測定せし所と図上記する所と経緯度の差違なきに至り大に驚き且其正確に服し測量を下田に止む

前和蘭医員シイボルト再来す七月幕府之れを江戸に招致し医学上の質疑をなすへきとの命あり（シーボルト時年六十六）

幕老より種痘所長大槻俊斎へ蘭人シイボルト御呼寄相成候に付有志之者医学研究のため質問同人旅宿へ相越候義差許可相成旨先西三人を差遣候様相心得也成人物相選名前取調可被申聞と事
シイボルト入国業止より既に三十年日本にも時勢一変せしと聞き今一度東航せんと三年前（己未）長崎に来り鳴門人の二宮敬作再往あつしる痛く悦びたり（重出）[illegible]国に和親締結となりしかば幕府も此に来て其招致の挙に及ぶ戸塚静海伊東玄朴竹内玄同林洞海等其招致館に至りて嘗恩を謝し新説を質す十月シイボルト辞去して帰国す

十月種痘所を西洋医学所と改称し洋方内外科教場とす

幕府設置の公署は評定所勘定所学問所[illegible]所等某所と称す十一正式に上ると漢医多紀氏監督せる医学館は寛政中幕府の直営となり旧称を用ゐ且多紀氏世襲の習学を伝へたり種痘所の改称初め単に医学所とありしが館長多紀永春院法印元佶内許して同しく医学所と改称せ[illegible]と請ふ於是幕議更に西洋の二字を新に冠らせしと云ふ

農商辨　神田孝平撰

東方諸国は農を以て国を立て西方諸国は商を以て国を立つ地力限あり故に租税も亦限あり農を以て国を立つれば其国常に貧し東産西品四方に貿易すれば其利際限なし商を以て国を立つれば其国常に富むと
○利害各三条を挙げ併に其理を説き末に和歌一首
いふもうしいはぬもつらし我心髪かき乍つ心しる人もかな

砲科新論　大鳥圭介訳

談天　清人李善蘭漢訳　福田理軒訓点

瀛環志略　清人徐継畬撰　井上春洋訓点

遠西方彙　伊東貫斎撰

○

十一月外国奉行竹内下野守保徳 松平石見守康直 両使を欧洲に遣り英仏諸国に聘礼を修めしむ 箕作秋坪 福沢諭吉 福地源一郎等随行

明年福地より父苟庵に贈りたる手翰三月九日仏都巴理新着汽車迅速も紙筆所に尽すの無御坐候巴理は市都之美文物之備は欧羅巴第一之地と申候而も十四日仏皇帝に[illegible]第三世諸見仕候今西洲第一之英雄[illegible]其容貌に相知中に四月朔巴理出立[illegible]仏軍艦にて英国に渡り[illegible]海峡を過ぎ直に汽車夕六時倫敦着仕候[illegible]繁華人口盛なる事[illegible]第一と云々[illegible]江戸にも彷彿[illegible]巴理とも[illegible]

十二月咸臨丸を小笠原島に遣り領土を確證し海湾測定す

先是米人の来て此島に居住する者あり依て此事あり
○咸臨丸船長も小野友五郎（上出）内外湾の海底を測量せり一行中本草家阿部櫟斎あり後年の事ながら櫟斎手稿若干を其家より贈られしが中に小笠原島図と十数枚あり明治某年海軍水路寮にて笠島測量の挙あり図を聞けて其図を富士川中佐に贈り後中佐の謝状来りて幕府より父島湾の海測ありしを伝聞すれども其図を存せざるを遺憾とせしが御贈興中に測量表記入の図ありて當時の深浅を知り大利益を得申候云々

五月蕃書調所を一橋門外に新営し洋書調所と改称（南校大学其地也）

洋学を作て蕃学とせしも七年前也至是其旧稱を復せり
先是箕作[illegible]一郎等を英学教授手伝となし林正十郎等を仏学助教とし両科を分つ又精煉物産画学の三科を設け宇都宮鉱之進[illegible]
○伊藤圭介を物産学に川上冬崖（三出）を画学[illegible]
[illegible]

六月和蘭国に軍艦製造を依嘱す因て榎本釜次郎（武揚 二十七）**赤松大三郎**（則良 二十）**等を遣り航海術を学ばしむ医師林研海**（紀 十九）**伊東玄伯**（方成 三十一）**附随 洋書調所より教授方西周助**（周 三十七）**津田真一郎**（真道 三十四）**同行して国法国政諸学を修む**（海外留学第一行）

八月緒方洪庵（五十三）**江戸に召され西洋医学所頭取となる**

古賀茶渓撰 緒方洪庵門徒之盛一時無敵[illegible]君門其所薫陶殆遍天下[illegible]其名心嘉之而不敢薦[illegible]将上言[illegible]君年五十三大府有後命君固辞再四[illegible]其命東来[illegible]為法眼兼督医学校時校創立君設科立則[illegible]来学者日多（研文）

十二月陸軍奉行を置く歩兵砲兵騎兵の分立と後総て仏蘭西国の兵制に依らしむ又民兵を募り歩兵組を創立す

歩兵組は徳川旗下士の軍役として五百石一人千石三人三千石十人の割合を以て募集し且訓練せしめしなり

下田人下岡蓮杖（久之助）**写真術を学び是年横浜に開業**

同時江戸に玉川三次（本姓藤之助）**あり亦照相術を唱道す**

○二人は横浜開港以後外人に就き其術を習得せしもの[illegible]

長崎人上野彦馬も亦撮影術を以て家を立つ（下参考見）

英和対訳袖珍辞書　堀達之助等編（洋書調所刊行）

堀氏は主任にて助手は西周一郎千村五郎也目下急要の書なれば二ヶ年にて成稿し上梓したり○本書[illegible]英蘭対訳書を採り其蘭を去りて訂正を加へしとか[illegible]

校理日本紀行　手塚節蔵　工藤岩治　合訳

原書は二年前木村摂津守帰て大槻磐渓に贈れる者にて其主君伊達侯慶邦に呈す侯命して訳せしむ[illegible]手塚は佐倉人工藤は津軽人なり[illegible]

官版バタビヤ新聞　洋書調所出板

蕃書調所筆記方にて蕃書取調外国新聞の抄記也（上出）御用書肆万屋兵より木活字にて刊行す此他海外新聞刻集あり又文部にて発行せし漢文の海外新報六合叢談香港新聞[illegible]

七新薬説　司馬凌海撰

沃顛硝酸銀[illegible]

舎密局必携　上野彦馬撰

[illegible]

三月家茂将軍上洛六月海路東歸十二月海路再上明年六月
宣旨下る三月将軍以後二百三十八年ぶりにて将軍の京都入覲なり海路往返ともに紀州藩士官吏の連乗也

五月赤馬海峡にて長州藩士等攘夷を唱へ米佛蘭三國船を発砲し却て撃破きる七月英艦直る鹿兒島に入る薩州藩士と本砲戰し英艦逃れ去る

馬廐両度の砲撃に出る西洋式もて築造せしもの

八月洋書調所を更る開成所と改稱し其學則を更定し新

數學局を設置す神田孝平を教授方とす

此時蘭學漸衰へ英佛独逸等日々盛すり於是學則を更革外國学校ノ教則ニ倣ヒ教場ヲ廣大ニスル文部省第一年報ヨリ見ル

長崎英語所を立山に移し洋學所と改稱す英蘭佛魯及支那

五國語を講習せしめ後又濟美館と稱す

松本良順上士ニ醫學所頭取に為る校則を改革し醫道一新

良順右長崎七年医学を研究し意用して東帰たるに付る仲奥詰医師仮役ヲ以て命ぜられ伊東玄朴と執務ヲ以て本年ノ申言ヲ西洋医学ヲ為し書用ヲ通ヤすし一ノ其模範を設設ヲ其設備等力を得しより玄朴い仮医を置めりの寺て洋庵北方本堂廣敬堂力を為る西洋の二字をまる

鳥羽藩士近藤誠一郎ミ攻玉塾を建て蘭學洋算及航海術の

教場を起す

誠一郎ヲ芳隅後組長琴小ミ蘭學を修めたれ共海軍操練所及武方ヲ以て大小航海術を学ぶ

芳隅曾て京ヨリ江戸に出て攻玉塾を開き蘭学洋算ヲ教授ス

入門ヲ以て蘭学を修めたる者多し

攻玉塾先生の恩忘れ難き人

英吉利文典　冊子為もより本蓋文典ト呼ベシ

同　單語篇

同　會話篇

萬有新編　物理學の初步

右ハ開成所の欧文教科書なり本所ハ活版掛といふ文質あり鉛製模文活字を佛へ注文印刷者一切其手を仮て製作されしなり　櫻章居士 本稿未詳

硝石製煉法　西洋時辰儀定刻便覽　中村好則

銃戰紀談　長山樗園

文久年間ハ西洋譯書の世に出づる者前後ヲ比して其少きを覚ゆ是れ家藏本の上ヲ就き云ふるが如くなれど或る時勢の然らしむる所なるか其子細を横濱開港當時より使の接夷唱導の徒か商人を賣かして夷人ヽ賣買する者ヲ斬り殺すなど云ふ騒しなり洋學者も其累威を顧慮して翻譯を手控となり反對ヲ出板苦も少きかと思はる

或人曰く當時の學者を開國ヲまれ鎖國ヲまれ國事ヲ奔走して著訳など者みる者多からずりしなるん此言一理あるが如くなれど接夷鎖國ヲ奔走せし人々も大率漢學者流ヲて洋學修むる者ヲも蓋少し故ヲ一説として存せんのみ

五月海軍操練所を兵庫港神戸ヲ置き軍艦奉行勝安房守海舟

摂州海岸の警備を督せしむ十月將府被年免職閑居一年

○琴病ヲ為て五位任官の命を諾ハ大を抜仰付とのみ受後者宜しく最小の者を撰ふべし閑東ヲ於て奇州より小田原ヲ守る赤城ヲ鎮し此前後成島柳北幕臣ヲ納兵奉行の時勢力ヲ為べしと薩摩守と伊豆守ヲ出しる迷惑ヲ為べし大隅守と意見ヲ為べしとかり神戸海軍所ヲ勝の名ヲ為へ設置の士来集ヲ者日ニ多し善吏ヲ接夷黨ヲ集窟とせんと海舟を東帰せしめたり

佐久間修理亮將軍の召ヲ應じ京都ヲ上り盛る西洋文化を唱へ出し七月肥後浪士川上彦齊吾のため殺さる

象山書者十年先を其罪を免ずれ三月京都ヲ召ヲ門人皆五ヲ京都で接夷の徒異行を殺て止しむる

象山不肯ヲ付ヲ数ヲ為めて山橋ヲ殺て

桝手附の命を受けて盤ヲ開國論ヲ説き洋式の馬鞍ヲ踏り

海中を駆行せしかど果し此死ヲ遂へり

蛤門の変ヨリ於ヲ長州追討の軍事起る

加藤弘藏に其作秋坪の福澤諭吉ニ並ヲ幕府直臣ヲ挙ぐる

加藤ヲ開成所教授其作福澤ヲ外國方記官ヲ為る後又英作

奇一郎ヲ杉田廣卿ニ次ぐ記測ヲ為る

鹿兒島藩ヲ英米両國ヲ留學生十六人ヲ遣る

町田寺島鮫島吉田森等ヲ

勘定奉行小栗上野介始建議して相州横須賀ヲ造船場設置

江戸内海ヲ造船場ヲ建て相模ヲ横須賀ヲ

仏國公使ロッシュ氏ヲ非常の変ヨリ乃

費金二百四十万弗と銘米ヲ○琴高度ヲ止一時中絶ヤ

○明治以所英仏米蘭ヲ四年ヲ成年ヲ絶ヤ

○和庵漫録ヲ上野笑ヲ一常時の大船ヲ絶ヤ

○ドック仮船所ヲ取立ヲ賛ヲ他ヲ斉藤の口實と

附費家の等等ヲ大達すべしと云ふ基此話ヲ出徹る而

ヲ家ヲ慎むべき常時ヲ云ふ

四月新聞紙　横濱発行一月二回　但六月廃刊

岸田銀次郎本間潛藏清田彦藏三人所拵

ヲ新聞紙ヲ刊行しれるも元治元年なり横濱ヲ在て

ヘボン氏ヲ和英對訳科書ヲ編著すヲ時ヲ皆ヲ

者ヲ相継ヲ来ヲ此人ヲ横州の彦藏といふ漂流十一年ヲ

横濱ヲ住みたり十九年ヲ彦藏ヲ遠い外國ヲ事情ヲ質問

又英語ヲも習いたり其後迷州州川人ヲて本間潛藏と

いふ者ヲ英語ヲ修むるたの横濱ヲ在り一日彦藏ヲ等

日ヲ語て曰く米國ヲ新聞紙ヲといふ者ヲ有り世間の珍事

ヲ國ヲ刊行せんヲ思立ち彦藏ヲ西洋新聞ヲ反訳して

ヲ刊ヲ本間と日本文ヲ綴り新聞紙ヲ名づけ自身横濱市中

ヲ配達したり是実ヲ我日本國ヲ於ける新聞の元祖也

砲軍操法　歩兵心得

歩兵刹律　歩兵練法

茶城典型　馬療新書

佛語明要　右ハ陸軍所刊行出版ヲ銘年前後発行

村上英俊撰

上の佛蘭西語林ヲ増補訂正ヲ加へ十餘年の苦辛ヲ経て

文政ヲ到訳科書なり佛蘭西學ヲ修むる者是書ヲ得て

博物新編　大進ヲ大利益ヲ門ヲ

美人合信原撰　漢文訓点

聯邦志略　米人神治文撰　美作院甫訓點

二月開成所ニ理學化學の二科を教授す　明年星学兵学
十月長崎精得館も物理舎密の二教場を設く
醫學所も和蘭學則ニ準據して七科を置く每週試業を行ひ生徒の學力を定む　教授諸職ハ大略開成所ニ同し

七科ハ理化学解剖学生理学病理学薬剤学及内科外科
督学松本良順ハ嚢ニ幕命を奉じ蘭医ポンペニ就きて彼國の医学を修め既ニ長崎ニ於て精得館を設置せり（上出）其江戸ニ帰て医学所ニ頭取となるや先ツ旧規を去除し（複出）和蘭の医学制度を教き教授法全く朋百所傳を遵守せしむ此時英学佛学次第ニ興り蘭学漸く衰退の徴を顕し来る然共医学所のみは屹として和蘭を奉じ教生間或は英佛講習するもの其自修を黙過して公唱を許さずといふ教授方は坪井信良坪井芳洲桐原玄海島村鼎甫石井謙道足立寛田代一徳等前後相立て教職を執れり

石黒況翁曰く余の医学所ニ入学せしも二十一才の時即慶應元年であつた其時学生も凡三十人計り後で大家となつた佐々木東洋長谷川泰大澤謙二の諸氏などは同窓で医者ニならなかつた渡辺洪基も其一人であるが八十歳今日から振返して見ると面白い事も色々あるが其中で解剖学の会読の一人も真の人骨で研究したいと云ふ一人が小塚原の御仕置場（刑場）で得られる…（以下判読困難）

西洋各國盛衰強弱表　津田真一郎譯
萬國公法　米人丁韙良漢譯
本書ハ故一八六四年撰其例言ニ是書所録條例名為萬國公法蓋係諸國通行者非一國所得私也とあり去年刊行其翻載するや開成所ニ於て漢文ニ訓點を施し直ニ上梓
砲術新編　山中敬斐譯
杉田所訳砲術訓蒙ト同一原書也但三版六版の差あり
塿氏砲論　内藤類次郎　丹波　尾崎又八　肥後　合譯
三元素略説　廣川晴軒撰
火熱電三素同一説なり○晴軒名會稱徳三郎越後小千谷人少善算術年五十七始て江戸ニ来り箕作阮甫ニ就きて蘭学を修め帰郷して此書を作り外ニ舎密一家言等あり
外科醫法　佐藤舜海譯

飯沼慾齋　八二　五月五日　大垣田覚寺
大槻磐次　五五　六月十三日　仙台保寿寺
小出長十郎　六九　八月十二日　徳島某寺
土生玄昌　六九　十月八日　江戸某寺

四月幕府令　海外修學并貿易を許す
海外諸國へ向後学術修行又ハ商業之為め相越度志願之者ハ願出次第御差許可相成候間紀之上御免之印章を相渡可申候
家茂将軍先是長州問罪の師を督して大坂城ニ駐在す六月勝安房守復職従軍七月將軍病む
○将軍の疾ハ脚氣病なり侍医松本法眼の談ニ此時征討軍不利一夜閣老某窪所ニ來り軍事を議せんとす法眼遮て曰く今少しく安眠を被遊るまで待れよといふイヤ國家の急事時を猶豫ならずと直ニ入りて申言将軍起坐聞之愈心落ち令せられたり當時従是云ふも恐多しと黄梁一夢ニ舊政尚機密人以不得探其実従為揣摩之説慎庵費迺會合衆國師船強請互市或以為憂悖而梵不知公実患者時適花萬温庵費外問頻有異言然亦以脚疾内攻俄費非有他罪事恐後人輾轉謬以千里也と見る慎徳温恭昭徳三世相継を並ニ急病ニ罹ニ時ゝ時として浮説海ニ起ニ豈又得已國家将亡必有妖孼夫此之謂歟
九月海軍留學生榎本釜次郎武揚赤松大三郎則良等新造の軍艦開陽丸ニ乗りて歸朝す
十月海軍奉行を置き十一月講武所を陸軍所ニ併す
徳川家人非職者悉海陸両軍ニ分屬して兵役ニ就しむ
十二月一橋中納言慶喜ニ勅命を以て徳川将軍十五代相續
是月開成所より中村敬輔箕作奎吾菊池大麓林董三郎外山捨八等十四人を留學生として英國ニ遣ニ
佛蘭西國ニて博覧會を開く我國よりも出品せしかば徳川昭武（慶喜弟）を遣ニ箕作貞一郎名村泰蔵渋澤榮一高松凌雲等随行町人としては清水卯三郎若井兼三郎等も随へり
丹後人嵯峨根良吉ニ西洋砲学を以て鹿児島藩ニ禄仕す
良吉ハ宮津の士ニして大坂ニ出て蘭学を緒方塾ニ修め又江戸ニ至り江川の門ニ砲術を究む此年薩摩ニ往き藩の子弟を訓練せしが二年議論行はれずニテ自殺
秋田藩醫學校ニ洋學を置く佐藤貞壽其教頭たり信淵再甥

泰西國法論　津田真一郎
西洋事情　福澤諭吉
雷銃操法　福澤諭吉
生理發蒙　島村鼎甫
創痍新說　島村鼎甫
新藥百品考　坪井信良
醫療新書　坪井芳洲
經濟小學　神田孝平
○此書表紙見返し神田氏藏の下ニ唐通の朱印あり嘉永の頃江戸市中ニオヽシンガメ一挺四文と呼び歩く飴賣男あり兒輩等買取れず可愛ケリヤコリ神田カラ通フ憎リテ神田カラ通ハリヨカと節づけしてうたひながら身ぶりす一時非常ニ流行し貴賤老少と無くしてはやす其神田から通ニ取て唐通を自號とせしなり但其名附親ハ神川春三ニて唐人通の意とか
洋學便覽　柳川春三
佛蘭西文典　柳川春三
改正増補 英和對譯袖珍辭書　開成所發刊
五年前堀達之助等の編修せし辞書ニ堀越亀之輔國愛主として増訂を加へたるもの
和英語林集成　米人平文　岸田吟香共編
米國醫ヘボン横濱在留頗日本語ニ通ず因て吟香と協力編輯せし對訳辞書なり是年四月脱稿せしかば吟香携へて支那ニ赴き上海治版所ニ於て製本す世ニ平文辞書と云ふ
智環啓蒙　英人理雅谷原撰　柳川春三訓點
英國牧師レツクゼームス香港ニ於て所撰上層英文下層漢文也各種の事物を採て小品文とし彼此對訳益支那人を英文ニ導く栞なり
英國歩兵練法　赤松小三郎
小三郎ハ信州上田人江戸ニ出て象山海舟の門ニ入りて砲術を学ひしが去て長崎ニ赴き英学を修め帰て此著あり明年薩摩侯ニ招致せられんとより京都ニ至ニ然ニ浪士の為ニ殺さる

高島四郎大夫　六九　正月十四日　江戸駒込大円寺
吉雄幸載　七九　二月十二日　長崎禅林寺
青木文禎　六〇　三月廿四日　大坂法雲寺
春木南華　四一　六月十五日　江戸下谷幡随院
徳川家茂　二一　七月廿日　江戸増上寺
シイボルト　七一　九月　独逸本国
國友米壮　五五　十月廿日　江州国友村

五月慶喜将軍在二條城松平春岳山内容堂伊達宗城及島津久光等を饗應す米國寫真師ビワトを召し撮影せしむ
〇萬國新聞紙第九集廣告　私義寫真渡世仕此度手前ニ蒙御免大君之御姿を奉写し方にも私方ニ御出可被下候代金之分弐朱　横濱二十四番ビワト

十月徳川将軍慶喜上辭表奉還政權　江戸幕府創立以来二百六十五年
慶喜夙くより内外の形勢を通觀し政令一途に出ざれば國本難立幕府可廃されど代て國務を當るの其法其人なき如何をせんと苦慮中山内容堂より建言すらく天下の政朝廷より出すべし而して議政院を置き制度法令一切此院にて議定すべしと云々慶喜謂ふ聞く西洋に議院あると我國も其制を做ひ公卿諸侯を上院とし陪臣處士を下院とし上下合議して政事を行はゞ國家永遠に保つ得べしと決心して辭表を奉げしとぞ
〇辭表の御使に立ちし高家大沢基輔の談　辭表ハ大将軍内大臣而通なり参内奉上するも高家の職合なれど同僚數人皆憚ぢて避けて仕ふまつらんといふ者もなし一上席より順次に譲合ひ自分の所に至る自分此時二十一才席次最末席なり今日の場合なれば進出て御使に立ち申さん人下去弱輩者一人にては如何と恐多く一藤御立ちあれ某差添の格にて諸事取扱申さんと云へば一同顔を開き首肯たりかくて二人して御所に至りまゐり傳奏某卿に謁し辭表差出し某卿は将軍辭表を收め内府の方は其儘御下せらるゝ因て持帰り復命せしと

十一月開成所を外國奉行の所管とす
神田孝平柳川春三を頭取とせしが明年國事多難とて閉校

十二月王政復古の大詔出づ大政官を興し総裁議定參與の三職を置く　關白職将軍職并廃
〇三條大橋に制札を建つ其文に曰く
徳川内府宇内之形勢を察し政權を奉歸ト云付朝廷に於て萬機御裁決被成就ては博く天下之公論を採り偏黨之私なきを以て衆民と休戚を同く徳川祖先之制度も美事良法は其他變革無之旨被仰出候間列藩公明正大之聖意を奉戴し各安心して其家業を營み猶可仕か者也　慶應三年十二月　參與

是月大日本國璽を造る　刻者前播磨介中村元祥
慶應三年丁卯十二月十九日召元祥于非藏人口以教命刻大日本國璽未文方二寸四分方今吉王政復古一新異國其告文所用之璽是也我國開闢以來未曾有之不一大美事手而元祥何幸以批技應其選奉刻御璽表信異國題名萬代榮又至大矣不堪感佩之至恐懼々々
元祥号水竹近衛家諸大夫安政中還身文墨立家

野戰兵囊　仙臺武庫刊　瀬脇節藏　舊姓手塚
戰闘術門　長門陸軍學校　大村益太郎
佛蘭西答屈智幾　村上英俊
活兵要略　香山道太郎
三兵養生論　久我俊齋
筆算提要　伊藤慎藏
華盛頓軍記　廣瀬唯一
西洋雜誌　柳川春三
寫真鏡圖説　柳川春三
穆氏藥論　江馬播園
西洋衣食住　片山淳之助

享保以來一百五十年洋學者流の其間に輩出すると茂材名匠固より数ふるに遑あらず然共其率先殊業を立て實利を内外に施したる者蓋三人曰く大槻磐水曰く伊能東河曰く高島秋帆
大槻磐水は蘭學階梯を刻本として世に布き一般人士に横文の讀むべく蘭語の釈くべきを示せしぞ斯道發達されしに此れ由るされど徳川幕府蕃書翻譯局の創置有る訳員に挙らる此翻訳局ぞ帝國大學の源泉なれ
伊能東河は天度の里數を測定し全國の沿海を實測し日本國の位置形状始て完し其圖精且確後日英國人をして瞠若たらしむ真箇空前絶後の挙
高島秋帆の銃隊訓練を創めしは今日全國皆兵の基本なる火技中興洋兵開祖たるの語豈世を欺かんや

山本晴海　六四　二月二十五日　長崎　寺
赤松小三郎　三七　九月三日　京都黒谷
松田玄々堂　八二　京都東山
土屋公軍　五四

正月參與東久世通禧を兵庫港に遣り天皇親政を外國公使に告ぐ
日本國天皇告各國帝王及其臣民嚮者将軍徳川慶喜請歸政權制允之内外政事親裁之乃曰從前條約雖大君名稱自今而後當換以天皇稱而諸國交際之職專命有司等各國公使諒知斯旨　御名　國璽
七月詔曰く江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻湊ノ地宜ク親臨シテ其政ヲ視ルベシ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ガ海内一家東西同視ノ所以也
是月東京に病院を建て英國醫師ウヰリスを聘して兵士の創痍を療治せしむ
八月天皇即位の礼を京都に行ふ　御年十七
九月明治改元一世一元を永式とす
十月長崎精得館を醫學校とし数學理化學を加ふ蘭人を其教師とす又濟美館も廣運と改稱し更に米人佛人を雇用して語學教師とす
開成所理化局教場を大坂に徙し舎密局と稱し十一月新校を建つ明年兵庫縣所設洋學校を合せて理學所と改稱す後又開明學校と稱す

三月東京遷都先是五條の誓文を宣せらる廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ又智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシとあり乃大政官に集議院待詔局を置き衆議民言を受けさせ給ふ
六月大學校を東京に置く即徳川幕府昌平學問所なり十二月開成所を大學南校と稱し醫學所に病院を合せて大學東校と稱す其學規曰
道之為體無物不在無時不存其大無外其小無内乃天地自然之理人之所得而有其用則綱常其事則政教其詳則皇國以至漢土西洋諸書所載而學校所以講斯道廣知識成材德而奏實用於天下國家者也蓋國典之要在敬神祇尊皇道學者先務矣孝悌彝倫之教治國平天下之道莫備於漢籍又西洋則闡幽析微覈實日新之業如兵學醫學國之興敗民之死生繋焉雖外國其所長亦採擇以為吾有勿論而已此則不悖主上所誓破舊來陋習求天地公道求智識於世界振起皇基之聖旨是乃大學校規模也
洋學自普通學至専門學科其理ヲ究メ其技ヲ精スルヲ要トス　醫術其理ヲ明ニシ藥性ヲ審ニシ治驗ヲ設ケ療術實究ヲ要トス　兵法今此局ヲ設ケズ姑ク是ヲ兵部省ニ付ス
十二月東京横濱間電信線開通　五年九月大坂通信

二月京都にて大政官日誌發行　江戸にて中外新聞江湖新聞横濱にも藻汐草大坂にも内外新聞等相継て刊行す　六月近日新聞紙類刊行人心を惑し候品不少候に付不經官許刊行ハ差傳候相背候節ハ屹度御咎可被仰付候と令あり悉廢刊
立憲政體略　加藤弘藏
和蘭政典　神田孝平
中外貨幣度量考　公生三寛
外國事務　福地源一郎
訓蒙窮理圖解　福澤諭吉
英文熟語集　小幡篤次郎
蘭學事始　文化末杉田玄白斯學の起立因筆を手記して大槻玄澤に與へたる者原本久佚去年神田孝平之れを湯島坂上露店に得て杉田廉卿に贈る福澤諭吉曰く先輩の苦辛宜く後世に傳ふべしと刻費を供して上木せしむ　明年正月發行
先是福澤諭吉英學塾を芝新錢座に開き慶應義塾と稱す

静岡藩新に兵學校を駿州沼津城に設け各般學藝を教授す
兵學校記　明治紀元朝廷封我徳川公於駿河遠江治于静岡從者如帰市乃命有司所在安撫而別聚水陸軍人及子弟俊秀者於沼津以城充學館以講兵課業有数目曰漢學曰洋學曰教理曰圖畫曰體操曰練兵曰騎曰泅修之一二年其人彬々可用以故列國行人必請来觀或遣其藩人就而學若鹿島徳島特聘吾學官以訓練蓋以継新之初列國學制未備而沼津兵學為之率先也四年撤藩為縣以學館合於陸軍兵學寮於是在學諸子半升于朝半去改業為校為教官為商為農咸莫不竭力國家而知名當世者則昔日昔學之功至是始彰　下略〇中根香亭撰文
和蘭學制　開成所
和譯英字書　鹿兒島藩　サツマ辭書
交易問答　加藤弘之
徵毒新說　石黒忠悳
英政如何　鈴木唯一
蒸氣器械書　海軍學校
英文典　慶應義塾
世界國盡　福沢諭吉
質藥鑑法　石黒忠悳

七月大小名藩より貢進生を召し大學南校の西洋學藝を修めしひ尋て米佛諸國の留學生を遣ふ

大學の大文書道局を置く八月星學局と改稱し内田五觀をして曆作の事を司らしひ　大隈改曆以來三十年天度亦差小五觀思へらく是れ於是飯田の正確なるを若かず乃共理義功用を述言す政府亦赤萬國共通の便利なるを以て大陽改曆の事を命す明年文大文局と改稱

京都に舍密局を設け獨逸人ワクネルを聘し理化學講習自是諸藩の洋人を用ふ

長崎製鉄所を置く鉛製活字を本木昌造に多年苦辛を重ねて其效を收ひ能はず此去年上海より米國教師ガンブルを雇用し鑄造印刷始て成功を告げ尋て製鉄所を去り大坂橋藩東京の活版所を開く今日の活字版の隆盛を昌造の功績と云ふべし

十二月郵便開設

正月横濱官第一船漂破工（元治創工）を長崎造船所設置製鉄所改稱

四月大學を文部省と改ひ南校東校共に大學の二字を去らしひ

南校生徒一千二百人東校生徒一千人を學則を獨逸に改ひ本科據科合五百人

獨逸教師二人（ホフマン、ルル）を聘す然に獨逸語に通ずる者なし司馬凌海の外

ありて凌海有故退校獨立開塾す長谷川石黒両舍長其者を就き強ひて

復校を求め通譯の任を當らしめしと聞く（先是南校に獨逸學教場を設く）

七月大中小二百七十藩を撤し三府（東京大坂京）七十縣を置く因て貢進生停止

十一月南校新に生徒を募つ募ること二十餘名とす

十二月文部省令　今般西洋女教師を雇い共立女學校相開き華族より平民に至り入學差許候間志願者當省へ願書差出可申依生徒は女子八歳より十五歳まで授業料毎月金二両可相納事（明年二月南校の女學を廢す）

先是名古屋和歌山両藩新に洋學校を起し金澤藩亦醫學校を設く大藩既に如是なれば中小の藩士より都鄙處士に至り慷然として洋風を慕ふ昨日據爽の徒も亦一朝其面を革ひ於是飯田の業盛に行はれ譯書刊行前後數年公私甚多し

國法汎論（加藤弘之）　内田五觀　勧善訓蒙（箕作麟祥）　英和字書（長崎奥和新社）

輿地誌略　内田五觀　化學訓蒙（石黒忠悳）　字語譯彙（長崎奥和新社）

西國立志編（中村正直）　物理訓蒙（石田寅吉）　智海解纜（島山學）

自由之理（中村正直）　筆算訓蒙（塩田明敬）　浦泳小學（市川兼恭）

文明論概略（福澤諭吉）　動物訓蒙（田中芳男）　病理通論（三宅秀）

學問ノススメ（福澤諭吉）　解剖訓蒙（松村雅明）　道理圖解（田中義廉）

西洋易知錄（河津祐之）　星學圖說（神田孝平）　世界都路（寺内信行）

泰西史鑑（西村茂樹）　星學初步（矢島祐利）　伊藤普物語（浅井忠）

泰西農學（緒方惟一）　地學事始（箕作秋坪）　西史年表（西村茂樹）

慶應義塾（福澤諭吉）三田新校舍に遷る生徒三百餘人　東京に於て英學佛學獨學等の私塾前後十八校學生多き百餘人少きも六七十人と云ふ今記憶する校名を擧くれば

三叉塾（箕作秋坪）　北門社（山東直砥）

共立社（久保八）　新社（福地源一郎）

共學社（箕作麟祥）　攻玉社（近藤真琴）

春風社（岡鹿之助）　鳴門社（島内九郎右衛門）

同人社（中村正直）

當時の世評に同人社に教育家を出し共立社に士人を出し慶應義塾に商工を出すと云へり

五月書籍館を湯島に開き大學書籍講堂を本館とす　徳川幕府昌平校藏和漢圖書（一万二千六百餘部）及天文臺所藏和蘭其他洋書（千餘部）等悉皆閲覧を許す

八月學制を定め更に全国を中學（八百餘）小學（五万二千餘）とす

男女年六才より悉く小學校に就學せしひ其旨諭に曰く

人の其身を立て治産興業其生を遂ゲントスルハ智を修メ才を長ズルに依ル是學校の設アル所以なり日常言語書算を始メ士農工商技藝法律天文醫療等凡人の所營ハ皆學に在らサルハ無シサレバ學問ハ身を立ツルの財本なり翻て從來學校の設アルを學問ハ士人以上の物トシ農工婦女等ハ度外に置ク是治教の習弊なり今般學制を定め教則を改め邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめんことを期す

兼後華士族農工商及婦女等自奮て學に從事せん事を期す

九月東京師範學校を建て明年大坂仙臺並置す小學教師の養成場也

東京横濱間汽車鉄道成る九月開通式を擧く

十一月徴兵令公布男子満二十歳皆兵役に就しむ六鎮臺を置く

大陽改曆（明治五年十二月三日）以来宝曆改曆以来三百年に当る

すべて猶是大陽曆なり至是意を大陽真曆を行ふ事となり

四月南校を開成學校と改稱し專科を分置す諸藝學を佛國に取り礦山學を獨逸國に取り法工理三學を英國に取る

大坂理學所を開明學校と長崎語學所を廣運學校と改む

八月外國語學校建つ先是南校を英佛獨三語科より外語者を獨魯清の三語學所より西者を合せて本校を建つ　明年開明廣運両校を共に外國語學校と改稱すべしひ

二月東京日々新聞發行第一号活版二号以下木板なり

最初活字に印刷器いまだ発明せず故に其解版の後の使字すること心つかず打まきしまゝ急に文選する能はず活版を不自由の者と云ひ木刻とせしと云ふ

先是横濱毎日新聞を既に発行し活字職工を取寄用ひたり此前後京都新報名古屋新聞大坂新聞及郵便報知新聞並起

三月湯島聖堂に於て博覧會開張大抛家藏を陳列實状を受し今般博覧會に於て放観に供し衆人の知見を開導せし裨益不尠嘉稱すべし仍て付賞状完之　文部省博物館

四月日本政表　統計學始て興る

改曆詔　我國通行の曆たる大陽朔望を以て月を立つ故に二三年間閏月を置ザルを得ず終に推歩の差を生ず大陽曆大陽纏度に從て月を立つ毎四歳に閏一日を置き七千年後一日の差を生ずるに過ぎず其便不便同日の論を俟たず法明治五年十二月三日を以て六年一月一日とす

先人磐水之在世毎歳以南至後十一日設琴名曰新元會今也閏明廣運大陽改曆明治六年一月一日即新元也兒輩合辭曰王父先見不可不繼於是賓與先人磐息相及之士曰杉田氏曰柱川氏曰宇田川氏曰坪井氏曰英作氏是日天晴氣佳宥主會一堂稱觴交酌亦一時盛舉也詩以記焉　磐溪大槻茂憶昔先君磐水翁聞從此日醇泰風一家私曆新元會感泣今為天下公　兒引二孫相逐進遍家子弟約無違滴ニ三府七十縣終始新元更有誰（賓客甲賓新元閏會日より於八十年）

駐米公使森有礼保朝乃梅澤諭吉田村茂樹西周加藤弘之津田真道箕作秋坪中村正直ト謀り政米ノ文化を誘入ル人トテ明六社を興シ二月明六雜誌を発刊ス學藝雜誌の始なり

和蘭醫事雜誌　坪井信良設述醫事新聞を此書を始ムす

佐倉順天堂（佐藤尚中）東京に移轉し病院を湯島に設立す　先是（佐藤尚中）

大坂順天堂（梅田理軒）亦東京移置し數學塾を神田に建つ（関孝和流）

明治七年甲戌 1874

一月民選議院設立建言あり後藤象次郎江藤新平副島種臣等八人連署
蓋英米の國憲を倣はんとてなり（下番参見）
五月神戸大坂間汽車鉄道開通 後二年大阪京都間に開通
先是臺湾問罪の師を起こし蕃民を征服せしが清國と所属の建言を生ず
九月大久保参議を遣清大臣として處理せしむ其談判の用意と怠る
萬國公法を翻訳せしむ十月大隈重信朝（下番参見）
十一月金星太陽を經過す海軍省天文局地理寮等各其行過を試測す
歐米星學者流し前後相繼て我國に来り共に實測に從事したり
海軍にて風く英國音樂師を聘し歐洲樂曲を練習す尋て陸軍亦練習す
十二月宮内省も其樂師を雇用し伶人に歐洲樂を教授せしめたり

萬國公法の意を必用を生ずつ不翻譯局長其作麟祥に命あり
二十日間に成譯せしめと原書を英人ケントに携て二巻の
大冊なり日限付の大事業なりとて麟祥も英書を通ずる者
十餘人を集め晝夜分譯して竟に日限通り成稿呈進す此譯
當時刑部實典として金五百圓を與へらる麟祥謂ふ金を
分配せば面白からずと書物其他器物を買求め一統に分與し
たりとぞ
先是民選議院建言の政府の納るる所となりざるを不新聞各社
民權自由の輿論を引起せしめんと筆陣を揃へて政府の差
置を攻撃す既にして日々新聞其鋒を倒るし翻然尚早論を
唱出す末廣鉄腸情て一書を福地櫻痴に贈り其変説を詰問
櫻痴マネ一語ふれる答へたり果せるかな十月に至り東京
日日新聞に大政官記事印行御用の特命を受しと云ふ

八年乙亥 1875

一月電信幹線全通 伊藤工部卿上奏四し方今政化を資ケ人智を進ム
ルにハ電信線ノ功最多シ陸線ハ東京ヨリ長崎ニ至リ又青森ニ至ル
北ハ函館ヨリ小樽マデ通ク架設セラル氣脉相通シ焉遠ノ民モ隆盛
ノ澤ニ浴スルコト肇下ノ如シ云ヘリ
二月醫制を設け試驗を行ふ理化學生理病理内科外科解剖藥劑七科の
試驗に及第せざる者に醫業を聞く能はずと令す
十月淺草文庫建つ 湯島書籍館を徙し人なり本館に地方官會議
場に充てらるゝより淺草舊米倉南隅に就き文庫を置く（各の高等工業学校の前身なり）
當時庫藏の典籍に十四萬五千七百冊といふ
是月東京女子高等師範學校開校式を挙ぐ

四月醫學會社建つ 松本順佐藤尚中林紀杉田玄端長與專齋戸塚文海佐々木東洋石黒忠悳三宅秀等五十餘名所設
先是小學令る珠算を停め一般に西洋式筆算を用ゐしが然共
實行せざりき茲是珠算筆算併用を計したりしが此年八月
師範學校に於て教學教師速成科員を一つ珠算教授の書を
作りて利貞其術を珠算に採り其式を筆算に援り題して
算數術授業書と云ふ官版教科書に珠算と只此一書のみ
米國指立百年祭七月同國費府に記念博覽會の要あり文部省
より日本教育史を出陳せんと八月編纂を大槻修二に嘱す
六旬告成史に英文に訳し刊本とす 先是文部に日本編書
編輯の議起こ西村貞長の意見にて局員大槻文彦一人に命
ぜり其結毋語訳品を註す十間年成稿普通語凡四萬今所行
言海是也二書共に我國の創作に係る修三文彦文義（大槻磐水の後）
十一月京都同志社開校 上野人新島襄所設義塾（米國神学
校に学ひ五年帰朝し此社を設置す基督教学の始なり）

九年丙子 1876

三月官衙休暇日を日曜日と定む 先是一六休日とて月に朔暇六回也
至是西洋風に倣ひ一週一回の休暇とす 日曜ドンタクと呼ぶ是ハ
蘭語訛轉にて英語サンデイ也行樂日の義となりて六回休暇の時も
一六ドンタクと呼べり長崎にて以前より此稱あり日曜の外なりとず
絲に休業遊樂をドンタクと稱す從て神社祭礼に假装行列するなど
其事をドンタクと呼ひ肥筑の國より傳播して通語となれり
七月布告 既に准許を得タル新聞紙に國安妨害と認ふる者ハ其発行
禁止又停止すべし 先是各新聞記者も民権論を提げ米國の政態に
共和政治を建つべし又政府なり君主力政府なりとずと
など盛に紙面に掲け禁錮笞刑の者此年に相継く
九月詔曰 國憲創定ハ國家ノ重典千載ノ偉業タリ汝等勵精從事速ニ
竣功ヲ奏セヨ 元老院議長有栖川熾仁親王同議官柳原前光福羽美
静中島信行細川潤二郎神田孝平を憲法取調委員とす（三年後憲法発布）
先是工部省に工學寮あり是年工部大學校と
改稱 内務省に赤囊學校を置く（後共に帝國大學に合併）

十年丁丑 1877

四月東京大學建立 乃開成學校醫學校を合せたり理法文醫四科大學
後七年本郷新技地に移り遂に帝國大學と稱す
六月萬國郵便聯合に同盟に交通を便なり
十月學習院開校式を挙ぐ 華族教育の特殊學校なり
此時九州乱起る薩軍兵兒俄に出て熊本城を圍む因て征討軍を遣りて
轉戰半歲終熊本城を攻撃す 先是六師所執火器各種なりしが此戰
門に依て軍銃費一の必要を覚る聞く 又聞く熊本籠城五十日錄
四月十四日援軍地に通ず其第一に入城せしを陸軍中佐山川浩なり
浩と會津藩士其城門に入り千大聲して叫ぶ城兵怪み問ふ之も戊辰籠城の時外敵より内警に困みたりと
此言を聞き俄に心付き各處探索せしに暗渠あり二度に終て白川
撤池となりて其臭苦を知せず一同見捨官の建策周到の感歎したり
元年戊辰聞東奥羽の戰より翌年函館の役あり其後佐賀熊本山口の
異変ありしも鹿兒島此一敗以降海内永く干戈の患を絶てり

組明治九年九月二十八日、示肩男清素、孫清修清復謹設追遠之
會以祭磐水府君之靈今茲而子當其後五十年忌辰所以有
此舉而用誕日則吉祭也本日掲王父真影於中堂陳列遺書於
其傍前堂挂寛政中所行新元曹園庭上則招請陸軍樂隊合奏
洋樂九曲其間書國牧師仁幸寒氏起漢祝詩竟繼以燭押今日
文明之效實在西洋學術蓋行于世之力而稱其學起因則不得
不謂由之吾王父者嗚呼蘭學之功于世故此會請惠臨諸君皆自和
蘭文典從事斯道者聊所以報府君之靈也 大槻修二同文学社記
公開演說嘤鳴社起る福地源一郎開学一等所唱出明年又福澤
諭吉に講談會を設く共に席料を收む
憶四年ぶりおのれ南時入社と静かられしう木戸孝允
苦四年ぶりおのれ南時入社と静かられしう木戸孝允
ゆずりき 大槻

學藝雜志抄 第一条 大島大山記 東京大學編纂

學問ノ方一ニレラ足ラズ力ヲ專修ノ間ニ用フベシ雖モ
別ニ見聞ヲ弘ムル具ナカル可ラズ是此書編纂ノ本意ナリ
歐米學藝諸書内外名家論說等隨得抄訳逐次刊行セントス
後生林行涵養ノ功ニ於テ少補ナクンバアラズト云爾
百科全書 第一号 天文地文地質鉱物
文部省刊行
文化辛未幕府天文臺ヲ翻訳局ニ置ク其第一着手厚生新編
百科全書也此局變轉六十又年皇威立て大學となる而一て
文部先此書を刊行す首あり尾ありと云ふべし
數學雜誌 東京數學會社発行
神田孝平柳愚斎塚本明毅小野友五郎福田理軒等會員百餘
昔時武治ノ世算數ヲ度外ニ措ク方今鋭習未去文武ノ職教
導ノ任モ往々數學ヲ講セズ本會ハ公撰一般數學ノ聞進ヲ
目的トス依テ毎會所議輯録印行ス立會ノ本志如此 神田孝平言
日本洋學年表 大槻修二撰
第一動業博覽會を東京上野に開く

泰西人の我邦に来る者は葡萄牙斯班牙の両國は其始とす當時南蛮と呼ぶ者是也我の交つは其戎器を求むるに在り彼の来つは其教法を弘むるに在り足利氏其惑を得て利を戰國に傳へ織田氏其教を納れて害を後世に遺す然共兵法医術の傳来は實に此時に始れり豊臣氏耶教の人民を誘惑するを慮み彤其利害を并せて之を拒絶するに至り両國に継きて到る者は和蘭英吉利とす之を紅毛と呼ぶ德川氏興隆の初に當り是れ皆其利害を互市の利に事として教法の害は傳へず其情外の久しきを耐ふる者此れ之れ由る英人の来航を辞せしより和蘭稽其利に任ずるに至る者二百餘年將軍吉宗天文を好み和蘭の其術を精しきを知りて始て禁書の禁を解き譯官の設を許せしに事繞る創見を屬するの外家齊在職文政中普魯生医士シイボルトの長崎に来るに及び從て其學術は直傳せし者伊東玄朴戸塚靜海等頗る多くして内外の療法を更る一層の善良を施せり

砲術に足利氏の世に火縄銃を傳へし後全く舊法を守りしが天保中高島秋帆其新式の傳習を受け加之銃隊の進退砲車の運轉等を古来の兵法火技を一変せり江川下曽根の徒其門より出でゝ其術遂に盛に無る

是れ皆素水以前に在る者なり其蘭國の後に出で能く百般の西洋學藝を究むる者あるも皆此先輩数子を待ちて興る者の外今其官事を記して利害を述ぶ前記と外國の交通を主とし正記て學士の事業を詳にす其来歴進歩を次第して洋學年表を作る

右序論は四十五年前の作也當時長崎の斯學を及ばざりしも長崎に通詞世界に後来心傷居たれば なり今回新撰年表を浄書せんとする當り今一度取調べんと出かけたれと依然たる長崎にて文學上のことは一切效能なし仍て藏書中より見出し星學語學に就て本木吉雄中野語氏に新書を加へたり見てたべ

大正十年三月　七十七叟大槻如電

昭和二年一月五日印刷
昭和二年一月十日發行

新撰洋學年表
定價金四圓

著者　大槻如電
東京府北豐嶋郡日暮里町字金杉二百五十八番地
發行者　大槻茂雄
東京市神田區花房町四番地
印刷者　七條儀

東京日本橋數寄屋町
發賣所　六合館
振替口座東京二三七一番

大坂北久寶寺町
開成館
振替口座大阪七九番

金屬版印刷所刷印所刷